‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις· ὁ βίος, ὑπόληψις.’

13号 1990.6.9
文・編集・発行
恋怪子

BLUES: ボイラーズのこと、憂歌団のこと。

僕にとってのブルースは、黒人音楽で、黒人しか出せない味の様なものがあってそれに魅かれていたのですが、ボイラーズは完璧にイエローブルースに変えていますね。というかブルース以外にも沢山音楽を聞いてきたという感じがしました。それを知らず知らずのうちに消化して曲にしている様です。ちょっと古くさくもあり、今っぽい音という形容の仕方をしてしまいますね。あと思ったのは、歌詞が自然ではない様に思えました。何か作られた歌詞(本人たちは真実を唄ってるんだろうけど)の様にも思えました。今イチ僕には説得力の欠けたものになってしまっています。

去年の12月3日原宿歩行者天国でボイラーズをはじめてきいてから、ブルースについてたくさんのことを考えた。ボイラーズのライブテープをきいてもらった高校生から上記の手紙がきた。この手紙はブルースを感じブルースについて考えるのにずいぶんと助けになってくれたと思う。感じたことだけを手がかりにして、自分では「これがブルースだ」と承知していることを、ほんとうにそう感じているのか?と何回も何回も自分に問いなおす働きをしてくれたから。そして、現在いえることは、私にとってブルースというのは、そのスタイルをいうんじゃなくて、魂のありさまをいうのだということ。

5月13日 日比谷野外音楽堂にジャパン・ブルース・カーニバルをききにいった。前座のバンドがやったあと、憂歌団登場。待ってました!とばかりに歓声があがる。長くやっているだけのことはある。芸はあるし、客あしらいもうまい。手なれたもんだ。だけど魂なし。卑近なことを歌って、卑近なことしか感じさせない。2年前の夏、よみうりランドEASTできいた「おそうじオバチャン」(こういうタイトルかどうかは知らないけど)は、せつなくて、あんなに笑えたのに、この日の「おそうじオバチャン」は、ただのいやらしい歌だった。ヴォーカルの人がステージの上で飲んでいた酒は、もしかしたら成功の美酒とやらで、それに酔うと魂がなくなるんじゃないの?

次にやったジョン・メイオールも、いろんな楽器を駆使し、芸はあるけどやっぱり魂なし。ココ(?)という名前のギターの人がちょっとよかっただけ。最後がバディ・ガイ。2曲目の途中で会場を出た。この日のライブでは前座のバンド、憂歌団、ジョン・メイオール、バディ・ガイ。ブルースのスタイルをいやっというほどきかされた。

スタイルを感じさせるということは、歌も演奏も保守的になっているっていうことだ。古い歌を現在の歌にするのは、芸じゃなくて魂。魂は決して二度と同じ形をとらない。「昨日」と同じものなら「今日」きくことはない。私が欲しいのは現在生きていることを感じさせる音楽。

きく側が「昨日」と同じものを求めるってことがあるかもしれない。憂歌団となれあっているファンの人たちを見てそう思った。「昨日」に生きている人たち同士のなれあい。たとえ観客が「昨日」を求めたとしても、やる側が現在なら、観客を現在に生きさせることができるはず。

ブルース・カーニバルの2日前、5月11日高円寺20000Vでボイラーズのライブがあった。何もとどいてこなくて、録音していたテープを途中で止めた。「王様と僕ら」の途中でライブハウスを出た。虚しくてがまんができなかった。虚しくて涙がでそうだった。この日は金曜日。気候もよかった。夜の新宿区役所通りは着飾った男たちと酒場の女たちでいっぱい。そこに私の居場所がないのはもちろんだけど、自分の心の中にも居場所がなかった。家が私の唯一の居場所のように思えて、早く家に帰りたかった。ボイラーズのやっている音楽は、やっている人たちの現在も、きいている人たちの現在も、ともにむき出しにしてしまう。だから、ライブがよくないとやっている人たちの現在がよくないと感じられてしまうし、きいている私自身の現在もよくないと強く思い知らされてしまう。だから、きつい。それでも、私にはこの日のライブがよかったといえる。なぜならボイラーズの音楽は「現在」だから。スタイルなんかじゃないから。

上記の手紙に「ブルース以外にも沢山音楽を聞いてきた感じがしました。それを知らず知らずのうちに消化して曲にしているようです」と書いてくれているような、ブルースというスタイルなんかじゃないものを感じさせる、そういうボイラーズが私は好きなのだ。現在をやってるバンドだから。

5月の!!!ライブ: 5/9 ジムノペディア ロフト 5/13 LIP CREAM アンティノック 5/14 OVER KILL 中野サンプラザ 5/19 風太郎とその一味 シアターPOO 5/25 ティラノザウルス ときわ座 5/26 ボイラーズ ロフト 5/31 ボンソウ アンティノック 5/11 THE BLOW UPS 20000V

BOOK: 「ジャニス ブルースに死す」デイヴィッド・ドルトン著(晶文社)

映画「JANIS」をみてまた読み返してみたら、ジャニス・ジョプリンの話がくっきり!ボビーとの話しは圧巻!!!写真、楽譜つき。

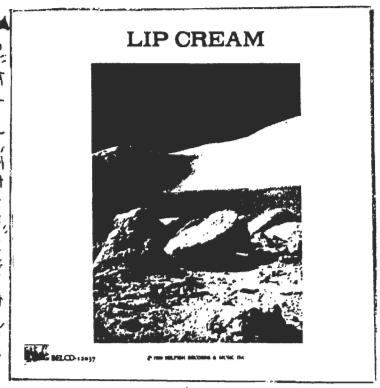
CD: PACO DE LUCIA "ENTRE DOS AGUAS"

アコースティックということばをよくきく。ライブのなかにアコースティックがはさまれることもよくある。5月1日中野サンプラザのアンジーでもあったし、5月22日神奈川県民ホールのZIGGYでもあった。アンジーの三戸華之介は「アコースティック」ということばがあまり氾濫していてテレくさいのか「ポンポコピー」などとわけのわからないことをいっていた。テレるくらいならやんなきゃいいのに。ま、アコースティックというのが流行なんですね。椅子にすわって、アコースティック・ギターを弾いてバラードを歌えば、それでアコースティックが、はい一丁あがりってわけ。

だけど、パコ・デ・ルシアをきくと、そうゆう余興みたいにやることは、音楽を大切にしていないんじゃないかと思えてしまう。楽しけりゃいいもんじゃないって。パコ・デ・ルシアをきいて、うまい・へたなんかじゃなくて、ものすごくうまいけど、ギターに対する想いの深さ、ギターを大切にしているその姿を感じとってほしいと思う。スタイルなんてことを全く感じさせず、ラディカルでパワフル。心の深いところにビシビシとどいてくる。憂歌団を「ブルース」というなら、パコ・デ・ルシアは「フラメンコ」といえるだろうけど、そんなジャンルとかスタイルとかじゃなくて、音楽を通して伝わってくるものは、魂。魂までとどいてくる。憂歌団の「ブルース」じゃそこまでとどいてこない。

CD: THE JEFF HEALEY BAND / LIP CREAM

"SEE THE LIGHT"につぐ2枚目のアルバム。歌がとても渋くなっていいカンジ!ゲストプレーヤーも何人か参加。



ジャケットのうら面なんだけどこっちのほうがいい

CDもおススメだけど、ライブがサイコー!ヴォーカルの人のすがすがしいカッコ良さは、なかなかのモン。

LIVE: ZIGGY 1990.5.22 神奈川県民ホール

3年前の4月渋谷ラ・ママではじめてZIGGYを見て、その印象が最悪で、それ以後ライブはみたことがないし、メジャーになってから「グローリア」という歌がとてもはやったらしいのだけど、きいたことがなくて(もしかしたら、きいたのかもしれないけど印象に残っていない)、だからZIGGYがどんな音楽をやっているのか全然知らなかった。なのになぜチケットを買ってまでZIGGYのライブに行ったかというと、それはヴォーカルの森重樹一という人物に関心をもったからである。雑誌のインタビューをチラホラ読んだり、ラジオで話すのを一回きいたり、他のライブに来ていたのを直接一回見たことがあって、それで、うーん、なかなかの人物にちがいないと勝手に思いこんで、じゃあZIGGYってどんなんだろう?ってことになったわけ。

ライブつまんなかったのにバッジ買ったというシロモノ

ZIGGYのバッジ

前から二列目の席だったけど、はじまってから30分ぐらいで席をたって、いちばんうしろの席で一人で見ていた女の子にその席をゆずった。ZIGGYって、いわゆる歌謡曲にものはえたようなものだった、金色の毛だったけどネ。ライブにいったあとだというのに、一つの歌詞も一つのメロディーも印象に残っていない。ととのっていて、ちゃんとしているステージなんだけど、松尾宗仁のギター、色気がなくて無味乾燥。ベースの人がいくらかクレージィな感じがしたけど、ZIGGYにはロックン・ロールの破綻が感じられない。あれが森重樹一のやりたいことなのかなァ?人物の方がおもしろくて、ステージはつまらなかった、ということでした。